徳島県立海部病院

Tokushima Prefectural Kaifu Hospital

新病院　平成29年5月8日開院

ご挨拶

このたび、平成27年６月から、南海トラフ巨大地震を迎え撃つ先端災害医療の拠点として、高台移転工事を進めてきた「新・徳島県立海部病院」が完成いたしました。

これもひとえに、地元の皆様をはじめ、多くの関係各位の深い御理解、御協力の賜であり、心から感謝を申し上げます。

この新・海部病院は、鉄筋コンクリート造６階建ての免震構造を採用しており、「太陽光発電設備」と「蓄電設備」を備えるほか、病院本体と立体駐車場双方の屋上でヘリコプターが離発着できる「ツインヘリポート」を整備するなど、災害医療拠点機能を一層充実・強化いたしますとともに、施設内には、若手医師の「研究・研修・実践」を支援する「地域医療研究センター」を設けました。

新たに、安全・安心な病院として生まれ変わった新・海部病院は、平常時には、より快適な療養環境を提供し、ドクターヘリによる救急医療の強化を図るとともに、県南地域における医療提供確保のため、総合診療医の育成道場の機能も担い、県南地域の医療を支えて参ります。

また、発災時には、「ツインヘリポート」で負傷者や物資を大規模に搬送するとともに、「災害病棟」や「災害時ICU」として運用するなど、「先端災害医療拠点」として、迅速かつ効果的な「災害医療」を提供することとしております。

新たな海部病院が、「県立３病院間のネットワーク」はもとより、「鳴門病院」や「徳島大学病院」、「地域の医療機関」を交えた緊密な連携体制のもとで、周辺地域も含めた、多くの皆様方の健康と安全・安心を担う、地域に開かれた「頼れる病院」、「県南の命を守る拠点」、「県民医療の最後の砦」となるようしっかりと取り組んで参りますので、一層の御支援、御協力をよろしくお願い申し上げます。

徳島県知事　飯泉嘉門

このたび、海部病院の高台移転新築工事が完了し、５月８日に開院の運びとなりました。

当事業を進めるに当たりまして、一方ならぬ御尽力を賜りました、地元の皆様をはじめとする多くの関係者の方々に対しまして、ここに深く感謝の意を表する次第でございます。

当院は、昭和38年、県立病院として開設以来、約半世紀にわたり、公立病院に課せられた使命として、県南地域における急性期医療、救急医療、へき地医療などに徳島大学や県医師会等との連携により取り組んできたところです。

こうした取組みをさらに進めるため、平成28年12月には、「海部・那賀モデル推進協定書」が、県知事と「那賀・牟岐・美波・海陽」の４町長との間で締結され、医療従事者の相互交流、ICTの活用によるネットワークの連携など、海部・那賀地域の公立医療機関が協力し合う一体的な医療提供体制の中で、基幹病院としての役割を果たして参ります。

末永く、将来にわたり、この新・海部病院が、地元の皆様はもとより、関係者の皆様から信頼され、また、働く職員が誇りを持てる病院となるよう、精一杯努力して参りたいと考えておりますので、これまでにも増して、御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

徳島県病院事業管理者　香川　征

当院は、南海トラフ巨大地震による津波被害への抜本的対策として、公立病院初の高台への移転改築工事を進めておりましたが、このたび地域や関係者の皆様の御支援、御協力により竣工・開院の運びとなり、新たな「県南地域の皆様の命を守る拠点」として生まれ変わることになりました。

新病院では、「免震構造」を採用し、病院屋上には「太陽光発電設備」や「ヘリポート」を整備するとともに、屋上部分を災害時用の「ヘリポート」として活用する「立体駐車場」を併設しております。これにより、平時には、Kサポート（遠隔診療支援システム）と併せて、新たに「ドクターヘリの運航」による救急医療の強化が図られるとともに、災害時には負傷者や物資の大規模搬送が可能になるほか、４階病棟等を被災患者を受け入れる「災害病棟」や「災害時ICU」として運用することで、医療機能をシームレスに移行できる「先端災害医療拠点」を構築いたしました。

さらに、「冠動脈造影検査」が可能となるCT等の専門医療機器の導入をはじめ、病床１床当たりの床面積を1.5倍の広さにするとともに個室も大幅に増加し、快適な療養環境を提供することにしております。

また、将来の地域医療を担う若手医師の研究・研修・実習の拠点となる「地域医療研究センター」の機能を拡充することにより、「海部・那賀モデルの中核病院」として、住民の皆様の安全・安心を守る地域医療の提供を支えて参ります。

今後とも、地域の皆様からの期待に応え、「地域に寄り添い信頼される病院」として、また、医師をはじめ医療スタッフからは、「魅力があり選ばれる病院」となることを目指して、全職員が一丸となり、「県民医療の最後の砦」としての役割をしっかり果たして参ります。なお一層の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

徳島県立海部病院長　坂東弘康

徳島県立病院事業・基本理念

「県民に支えられた病院として、県民医療の最後の砦となる」

「地域医療の輪」

エントランスホール陶板「地域医療の輪」

　エントランスホールに設置した「地域医療の輪」は、地域医療の連携や広がりを表現しています。

　徳島県立３病院（中央病院、三好病院、海部病院）の医療連携をトライアングルで表現し、それぞれの病院からの医療の広がりを波紋で表しています。

　半永久的に姿が変わらない素材である陶板を使用し、徳島県全域の医療が未来に向かって発展していくとの願いが込められています。

海部病院が柱とする医療分野

急性期医療

X線CT診断装置

地域医療

地域包括ケア病床

訪問診療・訪問看護

海部・那賀モデルの
基幹病院

救急医療

海部病院遠隔診療支援
システム「Ｋサポート」

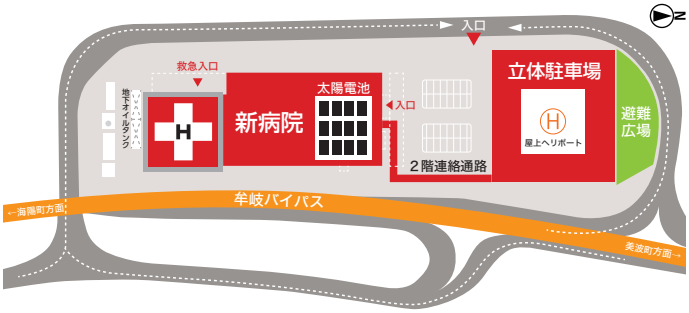
災害医療

ドクターヘリ

ヘリポート

「先端災害医療拠点」としての役割

南海トラフの巨大地震を
迎え撃つ「前線基地」
「平常時」と「災害時」の双方で
シームレスな医療を提供



配置図

助かる命を助けるヘリポートの導入
病院棟と立体駐車場の屋上にヘリポートを設置

新病院では、病院棟と立体駐車場の屋上の２ヶ所にヘリポートを設置しており、平常時には、ドクターヘリの運行による救急医療体制の強化を図るとともに、災害時には、消防防災ヘリや自衛隊等のヘリを運行することで、平常時と災害時の双方でシームレスな医療を提供します。

立体駐車場ヘリポートと病院棟２階をつなぐ
「連絡通路（ペデストリアンデッキ）」

立体駐車場屋上のヘリポートと病院２階をつなぐ「連絡通路（ペデストリアンデッキ）」を設置したことで、災害時に大型ヘリにより搬送されてきた負傷者や支援物資等を、病院棟手術室や負傷者治療受入スペースへ直接移送することができます。

災害時の病院機能維持に向けて
「太陽光発電＋蓄電池＋自家発電装置」

災害時にも病院機能を維持するため、病院棟屋上に太陽光発電、蓄電池及び自家発電装置を設置し、医療用電源等の確保に努めています。また、手術室や重症個室には無停電電源装置を設置するとともに、エントランスホールには医療ガス供給設備を備えるなど、各階において災害時の医療体制を整えています。

新病院フロア案内

	平常時	災害時
PH	ヘリポート（10ｔ対応） 重傷者搬送 太陽光発電	H
6F	屋上機械置場	災害倉庫
5F	病棟	「入院患者病棟」 110人以上対応 入院患者を配置
4F	病棟 分娩室	「災害病棟」 災害時ICU 110人以上対応 災害用備品倉庫
3F	地域医療研究センター 医局、事務局	「災害対策本部」 衛星電話 GPS携帯電話対応
2F	手術室、栄養科 リハビリテーション室 講堂	治療・受入れ 緊急手術 非常食調理
1F	受付・会計 外来診察 薬剤科　放射線科 検査技術科 地域支援室　等	「緊急治療フロア」 １次トリアージ～集中治療 災害用備品倉庫 備蓄薬品

病院棟　鉄筋コンクリート造６階建て（免震構造）
※エレベータは非常発電回路で停電時も稼働

屋上	駐車場 （ヘリポート：12ｔ対応）	H
2F	駐車場 （避難所）	
1F	駐車場 （避難所）	

立体駐車場　２階建て

連絡通路

海部・那賀地域における基幹病院としての役割

海部・那賀モデル推進協議会

海部･那賀地域における医師不足の解消に努め、公的医療機関が一体となった医療提供体制を構築するため、平成27年11月に地域の医療関係者や行政関係者によって構成される「海部･那賀モデル推進協議会」を立ち上げました。当院からは、上那賀、美波、海南の各町立病院に対して診療応援を行うなど、海部･那賀地域における診療体制の充実を図っています。

医療提供体制「海部・那賀モデル」推進協定

こうした連携体制を更に強化していくため、平成28年12月に徳島県は、那賀町、牟岐町、美波町及び海陽町の関係４町と医療提供体制「海部･那賀モデル」推進協定を締結しました。

この協定では、各病院間の医療従事者の相互交流、ICTの活用によるネットワークの構築、診療材料･医療機器の共同調達等を行うことで、海部･那賀地域における「質の高い、医療提供体制の構築」や「公立病院･診療所の効率的な運営」につなげていくこととしています。

今後も、協定に基づく取組みを一層充実させ、地域の皆様に質の高い医療サービスが提供できるよう、「海部･那賀モデル」を推進していきます。

協定締結式

総合診療医の育成道場「地域医療研究センター」

地域医療研究センターは、徳島大学と徳島県が共同で、地域医療に貢献できる総合的な医療人材の育成等を目的に、地域密着型の研究拠点として、平成19年10月に海部病院内に開設されました。

新病院では、地域医療を志す医師の養成や県南地域の医師の定着を促進するため、地域医療研究センターに研修室、シャワー室及び宿泊施設等を設置し、県南地域の医療機関で診療･研修に従事する医師や地域医療実習を行う医学生等の研究拠点となる環境の整備を行いました。

研修室

宿泊室（研修医用）

宿泊室（学生用）

センター概要	・海部病院３階に設置
	・延べ床面積　約460㎡
（内訳）	・地域医療研究センター
	・研修室、談話コーナー
	・宿泊室（研修医用３室、学生用２室）

フロア案内

受付・会計

外来診察

総合案内

講堂

リハビリテーション室

1 受付　2 会計　3 相談　4 院外処方箋受付

5 総合案内　6 検査　7 薬局　8 放射線科

22–40 外来　51 中央処置　52 エコー室

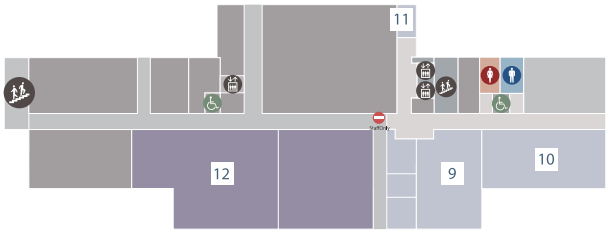
54 内視鏡室　55 化学療法　56–58 救急診察室　コンビニ

1F

9 リハビリテーション　10 講堂

11 脳波検査室　12 手術室

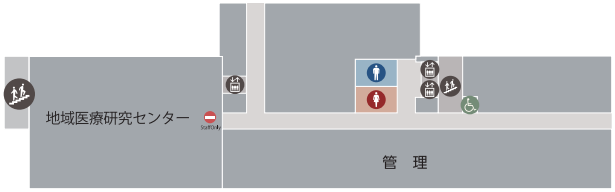
2F



管 理

地域医療研究センター

3F



4床室

5階病棟からの眺望

談話コーナー

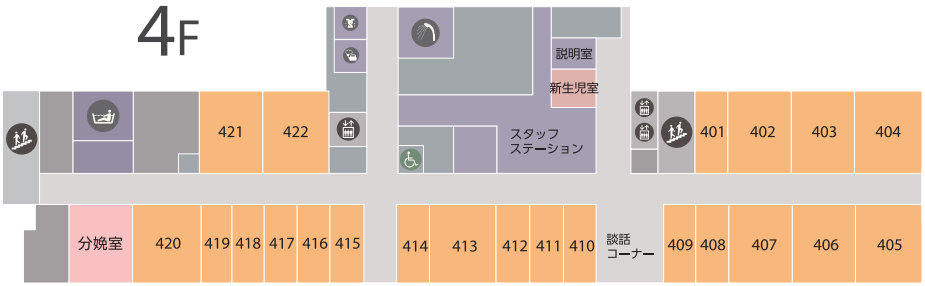
個室

分娩室

浴室・機械浴槽

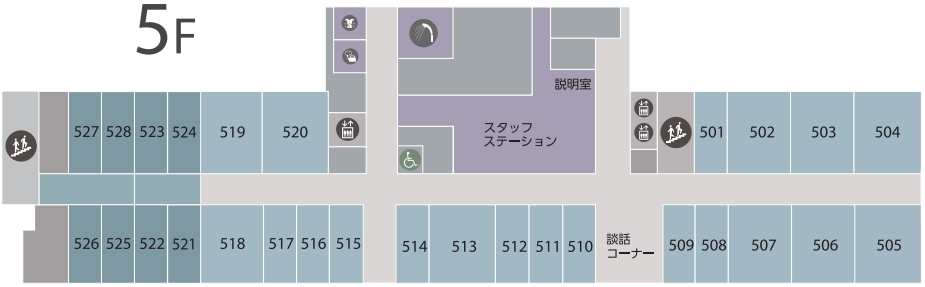
病 棟 401-422

分娩室　　新生児室



病 棟 501-528

（感染病室・結核病室）



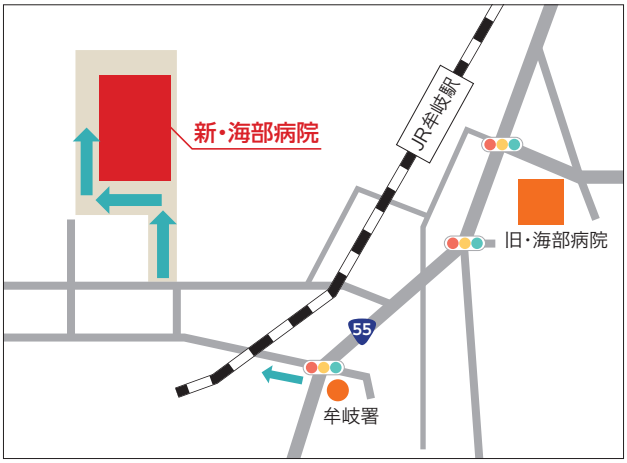
病院概要

開設日	昭和38年４月１日
所在地	〒775-0006 徳島県海部郡牟岐町大字中村字杉谷266番地
施　設	敷地面積　9,283㎡(海抜約15.6m) 延床面積10,759㎡(現病院の約1.9倍) 鉄筋コンクリート造６階建て(免震構造) 屋上ヘリポート(ヘリ最大荷重10ｔ)
駐車場	183台(平面駐車場16台、立体駐車場167台) 屋上ヘリポート(ヘリ最大荷重12ｔ) ※連絡通路により「立体駐車場屋上」と病院棟２階を直結
管理者･病院長	坂東弘康
診療科目	内科、外科、脳神経外科、整形外科 小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、放射線科
許可病床数	110床(一般102床、結核４床、感染症４床)
外来受付時間	午前８時～午前11時30分 ※救急患者は随時受付します。
休診日	土曜日、日曜日、祝日 年末年始(12月29日～１月３日)
面会時間	午前11時～午後８時
指定･認定状況	・日本医療機能評価機構認定病院　・救急告示病院 ・災害拠点病院　・へき地医療拠点病院 ・第二種感染症指定医療機関　・エイズ治療拠点病院 ・DPC対象病院　・臨床研修病院(協力型)

沿革

昭和38年 ４月	牟岐町国保直営海部中央病院を牟岐町から移譲され徳島県立海部病院として開設
昭和39年 ７月	救急病院に指定
昭和57年 ９月	改築工事起工式
昭和59年 ５月	新築落成式
平成 ９年 ４月	災害拠点病院に指定
平成16年 ３月	電子カルテシステム導入
平成17年 ４月	地方公営企業法全部適用
平成19年10月	徳島大学と徳島県が共同で海部病院内に地域医療研究センターを設置
平成20年 １月	医療機能評価バージョン５認定
平成21年 ７月	DPC対象病院となる
平成22年 ４月	徳島大学寄附講座の設置
平成25年 １月	医療機能評価バージョン６更新
平成25年 ２月	海部病院遠隔診療支援システム「Ｋサポート」導入
平成27年 ６月	新病院改築工事の起工式
平成27年11月	海部･那賀モデル推進協議会設置
平成28年12月	医療提供体制「海部･那賀モデル」推進協定締結
平成29年 ５月	新病院開院

地図･交通アクセス



- 最寄駅：ＪＲ牟岐線「牟岐駅」下車　徒歩約10分
- バ　ス：徳島バス南部「海部病院」下車
- 自動車：国道55号線沿い、牟岐署交差点を西(線路側)に曲がると右手に病院があります。　※現在工事中の牟岐バイパス沿いに立地しています。

徳島県立海部病院

〒775-0006　徳島県海部郡牟岐町大字中村字杉谷266番地
電話：0884-72-1166㈹　FAX：0884-72-3521
ＨＰ：http://133.242.186.80/